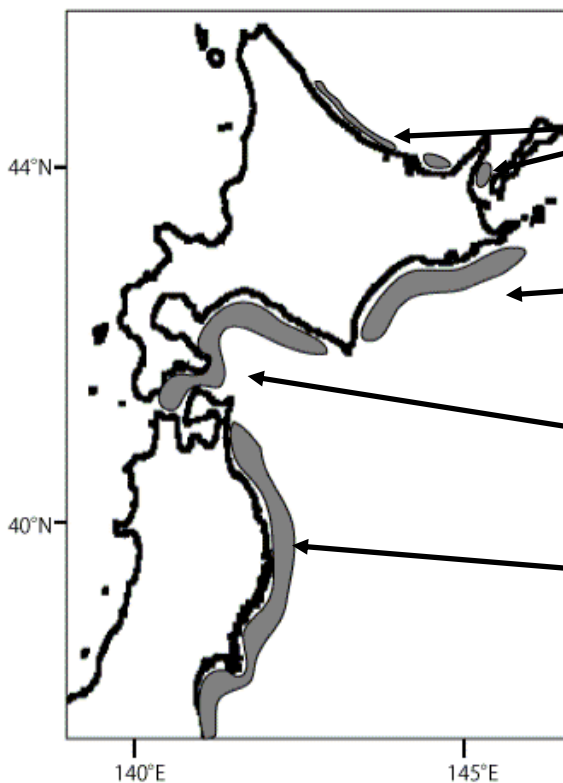


平成23年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成23年10月～12月)のポイント



常磐以北太平洋海域の来遊量は概ね前年並み。

根室海峡～オホーツク海：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

道東太平洋周辺海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年並み。

常磐～三陸周辺海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前半は前年より小さく、後半は前年並み。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、内海

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

担当：野上、北川

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成23年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2011年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸周辺海域、
津軽海峡～道南太平洋周辺海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：主に冬季発生系群（2011年級群）。

1. 道東太平洋周辺海域（いか釣り、底曳網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 10月まで漁場が形成される。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底曳網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 10～11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

3. 常磐～三陸周辺海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量 : 前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場 : 予報期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体の大きさ : 予報期間の前半は前年より小さく、後半は前年並み。

4. 津軽海峡～道南太平洋周辺海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量 : 前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場 : 予報期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

漁況の経過（2011年7～8月）および今後の見通しについての説明

(1) 資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970～1980年代は低位水準で推移した。1989年から増加に転じ、それ以降では1996年（年間漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった（図1）。近年の資源水準は高位から中位で推移しており、直近3年の漁獲量は横ばいで107千～117千トンの範囲であった。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸周辺海域および津軽海峡～道南太平洋周辺海域に区別される。2010年10～12月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は69.4千トンであり、道東太平洋周辺海域では2.2千トン、根室海峡～オホーツク海では31.8千トン、津軽海峡～道南太平洋周辺海域では11.3千トン、常磐～三陸周辺海域では24.1千トンであった（図2）。なお、近年の漁獲量のピークは9～11月である。

(2) 関連調査結果

8月上旬～9月上旬に実施された第2次漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター；以下、一斉調査）および関連いか釣り調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場）の結果（図3）、道東太平洋周辺海域（42°N以北、143°E以东）の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は11.99尾であり、前年（5.65尾）を上回った。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）は19.49尾であり、前年（2.16尾）を上回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41°N以北、143°E以西）は1.30尾であり、前年（3.51尾）を下回った。全水域では9.92尾となり前年（3.13尾）を上回った。

表層トロールネットを用いて実施した新規加入量調査（中央水産研究所、北海道区水産研究所、5～6月）によると、本予報期間に加入すると予想される外套背長5cm未満の個体のCPUE（1曳網当たり漁獲尾数）は、前年比23%（近年5年間の平均比24%）の低い水準にあった。

(3) 2011年の各海域の漁況経過（7～8月、一部集計中）

震災による定置網の被害や出漁する漁船数の減少などにより本州太平洋の沿岸の一部では水揚げ量に影響が現れている。2011年7～8月における太平洋沿岸の主要港での水揚げ量（生鮮：各道県の速報値等の集計による）は22.3千トンで、前年（同期、26.8千トン）並みであった。道東太平洋周辺海域は7.5千トンで、前年（同期、1.9千トン）を上回り、常磐～三陸海域周辺海域での水揚げ量（10.8千トン）は前年（同期、19.5千トン）を下回り、津軽海峡～道南太平洋周辺海域の水揚げ量（4.0千トン）は前年（同期、5.4千トン）を下回った。各地域の詳細な漁況経過は、表1に示す。

(4) 魚体の大きさ

8月上旬～9月上旬に実施された一斉調査で漁獲されたスルメイカ的全調査点での外套背長組成は、モードが18cmにある単峰型であり、前年（19cm）より1cm小さかった。海域別では、道東太平洋周辺海域がモード20cm（前年：19cm）、三陸周辺海域がモード18cm（前年：20cm）、津軽海峡～道南太平洋周辺海域がモード22cm（前年：18cm）であった（図4）。

7～9月に北海道～青森県で水揚げされたスルメイカの外套背長モードは、前年並みであった（表1）。

(5) 今後の見通しの説明

・本年8月までの各地の漁獲状況から判断すると、9月上旬現在の常磐以北太平洋海域における漁獲対象資源の水準は、道東太平洋周辺の海域で前年を上回るが、概ね前年並みであると推測される。一斉調査での平均 CPUE は道東太平洋周辺海域および三陸周辺海域では前年を上回ったが、津軽海峡～道南太平洋周辺海域では前年を下回った。加えて5～6月に実施した新規加入量調査において本予報期間に加入すると予想される外套背長5cm未達の個体の CPUE は前年を下回った。以上のことから本予報期間である10～12月における常磐以北太平洋海域への来遊量は、概ね前年並みと予測される。なお、本予報期間に常磐以北太平洋海域から日本海へ回遊するスルメイカの内来遊量も前年並みで、津軽海峡経由で日本海へ来遊する時期は海面水温が著しく高かった前年より早めと予測される。

・道東太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられている。5～6月に行われた新規加入量調査結果は前年を下回った。道東主要港へ水揚げする小型いか釣り船の7～8月の水揚げ量は前年を大きく上回り、1990年以降で最高であった（表1）。しかし、8月中旬以降の水揚げ量は前年を下回って推移しており（スルメイカ漁況・市況情報 漁業情報サービスセンター）、8月の CPUE（1日1隻当り漁獲量）は前年並みであった（表1）。8～9月の道東太平洋マサバ・マイワシ漁期中調査（流し網）において道東沖で漁獲されたスルメイカの CPUE（流し網調査1回当たり漁獲尾数）は前年を上回った（北海道浮魚ニュース16号：北海道立総合研究機構釧路水産試験場）。以上のことから本予報期間における道東太平洋周辺海域への来遊量は前年並みと予測される。なお、近年は道東太平洋周辺海域における漁獲量は11月には大きく減少し、主漁期は10月で終了している。魚体の大きさは、一斉調査結果から前年並みと考えられる。

・根室海峡～オホーツク海での漁獲対象資源は、太平洋沖合北上群が主体と考えられている。道東太平洋いか釣り調査における釧路以東での CPUE、7月の国後島南の海面水温（函館海洋气象台資料）および8月までに道東主要港へ水揚げした小型いか釣り船の平均 CPUE を用いた漁獲量予測結果から、根室海峡～オホーツク海への来遊量は前年並みと予測される（北海道立総合研究機構釧路水産試験場内部資料）。オホーツク海沿岸の表面水温は前年並みで推移しているため、本年も10～11月が主漁期になると予測される。魚体の大きさは道東太平洋周辺海域での調査結果から前年並みと考えられる。

・常磐～三陸周辺海域での漁獲対象資源は、三陸～津軽海峡周辺海域に分布する群を主体に道東太平洋周辺海域から南下する群が加わると考えられている。道東太平洋周辺海域の来遊量は前年並みと予測される。親潮第一分枝は8～9月にかなり北偏することが予測され（東北海区漁況予報平成23年 第1号 東北区水産研究所）、それ以降も同様と仮定すると、道東太平洋周辺海域から本海域への南下群は少ないことが予測される。8～9月の三陸周辺海域における調査船の CPUE は前年を上回ったが、津軽海峡～道南太平洋周辺海域における調査船の CPUE は前年を下回った（前述）。以上のことから常磐～三陸周辺海域の来遊量は前年を下回ると予測される。近年、岩手県以南では、本予報期間を通じて漁場となっている。魚体の大きさは、一斉調査の結果から予報期

間の前半は前年より小さいが、後半は前年並みになると考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、道東太平洋周辺海域およびその沖合からの南下群が主体と考えられている。この群は津軽暖流の勢力減少にともなう水温低下とともに津軽海峡東口周辺海域から日本海に移動すると考えられる。道東太平洋周辺海域への来遊量は前年並みと予測される（前述）。その沖合における8～9月の道東太平洋マサバ・マイワシ漁期中調査（流し網）で漁獲されたスルメイカのCPUEは前年を上回った（北海道浮魚ニュース16号：北海道立総合研究機構釧路水産試験場）。前年の津軽暖流の勢力は平年並み～やや弱勢であり（気象庁ホームページ <http://www.jma.go.jp/>）、本年も8～9月には津軽暖流の勢力は平年並み～やや弱勢と予測された（東北海区海況予報 平成23年 第1号 東北区水産研究所）。本年の10月以降の津軽暖流の勢力も同様と仮定すると、スルメイカが津軽海峡東口周辺海域において滞留する期間は前年並みと推察される。親潮第一分枝は北偏することが予測されるため（前述）、本海域への道東周辺海域からの来遊量は多くなることが予測される。以上のことから津軽海峡～道南太平洋周辺海域の来遊量は前年を上回ると予測される。三陸北部沿岸における9～11月の水温は平年よりやや高めに推移すると予測されているため（東北海区海況予報平成23年 第1号 東北区水産研究所）、予報期間を通じて漁場になると考えられる。魚体の大きさは、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年並みになると考えられる。

表1. 漁況経過（2011年7～8月、一部未集計）

	漁況経過
北海道 道東	7～8月の道東主要港（釧路港・十勝港）における釣り漁業による水揚げ量は、3,870トン（前年比230%）であった。8月のCPUEは前年比105%であった。
北海道 道南	8月の函館港における釣り漁業による水揚げ量は182トン（前年比114%）、CPUEは前年比103%であった。釣りで漁獲されたスルメイカの外套背長モードは7月に19cm（前年：20cm）、8月に20cm（前年：19cm）、9月に22cm（前年：22cm）で前年並みであった。南茅部における定置網による8月の水揚げ量は215トン（前年比17%）であった。浦河港における釣り漁業による水揚げ量は868トン（前年比146%）、CPUEは前年比121%であった。
青森	8月の八戸港、白糠港への釣り漁業による水揚げ量は、それぞれ1,100トン（前年比118%）、220トン（前年比60%）であった。CPUEは八戸港では前年比152%であったが、白糠港では88%であった。八戸港へのまき網漁業による水揚げ量（5,928トン）は、前年（8,290トン）を下回った。大畑港への釣り漁業による水揚げ量は354トン（前年比136%）であり、CPUEは前年比125%であった。八戸港で釣り漁業により漁獲されたスルメイカの外套背長モードは8月に21cm（前年：22cm）で前年並みであった。
岩手	震災の影響により漁獲情報未集計。
宮城	8月の主要10港における定置網漁業による水揚げ量は7トン（前年比14%）、釣り漁業による水揚げ量は120トン（前年比21%）で、CPUEは前年比97%であった。
福島	原発事故の影響により、漁獲は行われていない。

表1の続き

茨城	6月の主要港における沖合底曳網漁業による水揚げ量は6.7トン（前年比94%）、小型底曳網漁業による水揚げ量は3.9トン（前年比47%）であった。CPUEはそれぞれ前年比72%、29%に減少した。なお、7月～8月は底曳網漁業の禁漁期間である。
千葉	7月の主要港における定置網漁業による水揚げ量（1トン）は、前年（12トン）を下回った。釣り漁業による水揚げ量（24トン）は、前年（91トン）を下回り、CPUEは前年比80%であった。
神奈川	8月の主要2港における定置網漁業による水揚げ量は1キロ（前年比62%）、釣り漁業による水揚げ量は1トン（前年比43%）であった。
静岡	8月の主要港における釣り漁業による水揚げ量（7トン）は、前年（11トン）を下回り、CPUEも前年比35%に減少した。
三重	7月の主要港における釣り漁獲量は20トン（前年比198%）に増加し、CPUEも前年比121%であった。8月の主要港における中型まき網漁業による水揚げ量は1トンで前年（7トン）を下回った。
和歌山	8月の主要2港における釣り漁業による水揚げ量（28トン）が、前年（17トン）を上回った。
高知	8月の主要3港における釣り漁業による水揚げ量（19トン）が、前年（16トン）を上回った。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

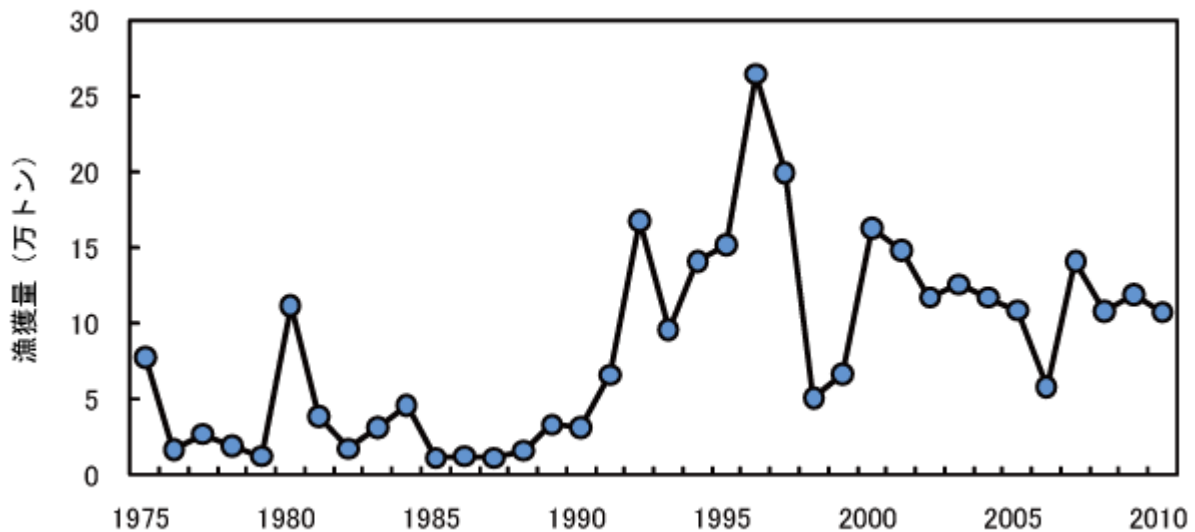


図1. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

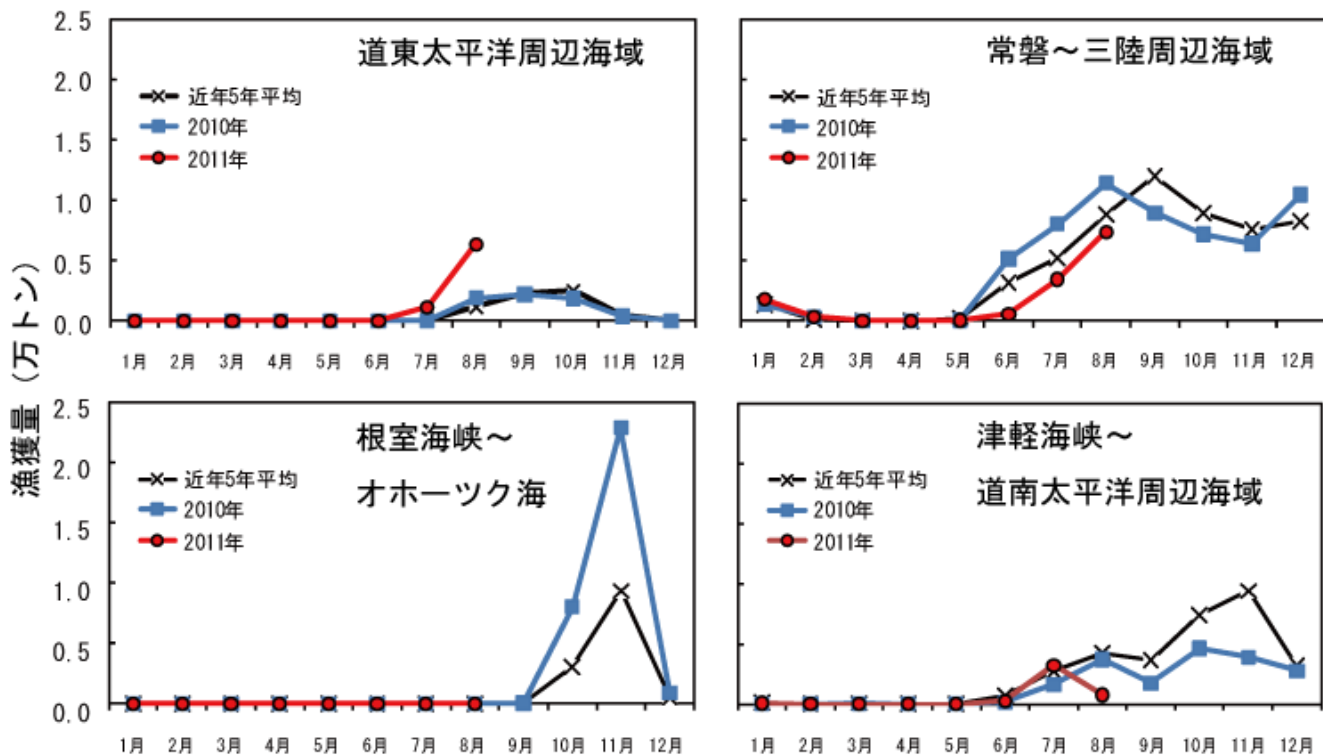


図2. スルメイカ月別海域別漁獲量（生鮮、釣り・底曳網・定置網・まき網）。近年5年は2006～2010年。

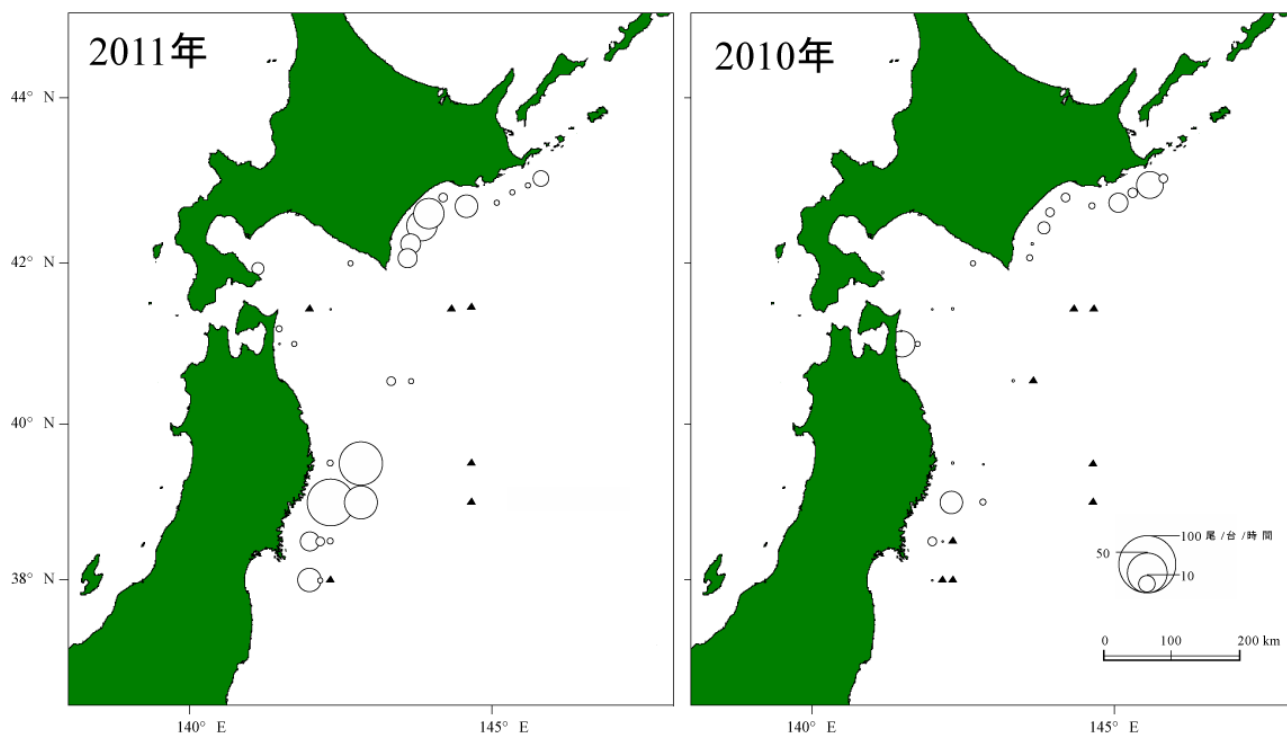


図3. 2010年と2011年の第2次漁場一斉調査および関連調査（8～9月）におけるいか釣り調査点とCPUE（釣機1台1時間当たり漁獲尾数）、▲は漁獲なしの調査点

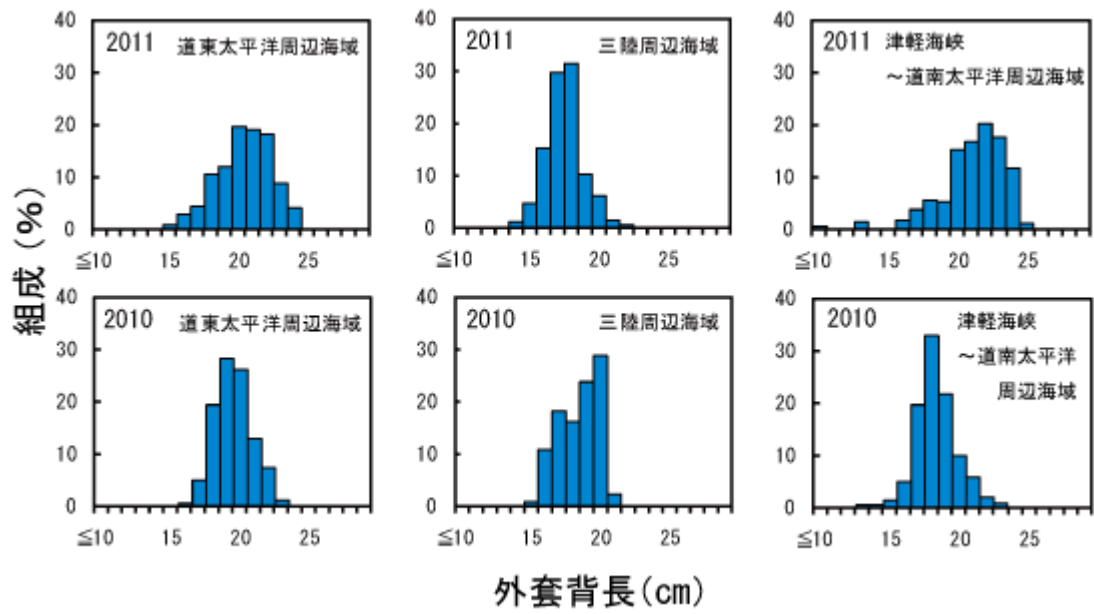


図4. 2010年と2011年の第2次漁場一斉調査による外套背長組成

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 中央水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関)
千葉県水産総合研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	